

## かごしま農36景



### 水共同体

私たちは、仲間うちで他人行儀なことをすると「水臭い」と言われ、下らないことにこだわっていると「水に流せ」と言われる。このように“水”を用いた言葉には、人間関係、しかも、お互いに関心ではられない状態を表す言葉が多い。その理由を農民作家山下惣一さんは「田に使う水にある」という。田は自分のものであっても、水は自分のものではない、皆でいっしょに使い、勝手なことができない。そのため、田舎は「水共同体」として発展。そこでは、何かにつけ自分を抑えて和を保たなければならない。

一方、都会は組織全体、社会全体のこともより個人の考えや利益を優先させる価値観、つまり個人主義が許される社会。個人が何をしようが基本的には自由、お互いに干渉しない。そこには「隣は何する人ぞ」と言った「匿名性」がある。これらは都会の魅力であり、若者を捉えて離さない。したがって、若者の都会への流出は、致し方ないことだと。したがって、こうした都会と田舎の相違から、田舎はソビエトのような社会主義社会、都会はアメリカのような自由主義社会にたとえた。

1月22日の朝日新聞『窓』の欄は、今度の震災で「肉親の死にも取り乱すことなく行動する遺族たち。略奪もなく、長い列をつくって食糧配給を待つ人々。・・・」の整然とした行動を「日本人が子供のころから『他人に迷惑をかけるな』と『和の精神』を教えられているため」とかいた朝鮮日報の社説を紹介。しかし、この社説は少々面映ゆい。「和の精神」など、むしろ「ダサイ」と感じている人が多いと思うからだろう。

事実、我が国は明治以降これまで近代化の道をひた走ってきた。この結果、生活様式やものの考え方もしきりに捉われない合理的なものになった。が、反面、自己中心的ともいえる個人主義がばっこ。不正融資、損失補填など一連のバブル経済事件も、その影響が無いとはいえないと思う。こうした中で、今回の震災は、自己を抑えた和の精神が息づいていることを示した。このことを素直に喜びたい。と同時に、その背景に「水共同体」の伝統が生きていたからこそと思うのは、うがち過ぎだろうか。

今回、団塊ジュニアの世代が自立する年頃になった。彼等は親父の世代と違って都会が故郷。「水共同体」との縁はうすい。このため「水共同体」の伝統がどうなるか気掛かりだ。こんな気の使い方は「水に流せ」と叱られそうだが。

(1995年3月)

◇「かごしま農36景 / 発行:鹿児島県農業農村整備情報センター」より

文:門松経久

写真:鶴田 政春「からいも王国」第3回かごしまフォト農美展